

令和5年度 会派調査研究報告書

(視察先1か所につき1枚)

会派名	新 生 ク ラ ブ
出席者	功刀 正広 守屋 久 金井 洋介 秋山 祥司 渡邊 愛彦
事業名	生活支援体制整備事業（生活支援コーディネーター）について
事業区分	①研究研修 ②調査

1. 韮崎市での課題と研修・調査の目的

(1) 韮崎市の課題 ①高齢化の進展 ②コロナ禍による繋がりの希薄化 ③行政依存の進行と行政職員の多忙化 (2) 調査の目的 課題①～③を踏まえ、以下を調査の目的とした。 ・高齢者などが住み慣れた地域で日常生活などの生活支援を受けることのできる体制づくり。 ・介護予防や健康づくり、生きがいつくりや居場所づくりへのサポート。 ・地域における生活支援サービスの多様な担い手の育成。

2. 実施概要

実施日時	令和 5年 11月 9日（木） 10：00 ～ 11：00
視察先	東京都調布市
担当部局	・地域福祉係地域支援担当 ・調布市社会福祉協議会
報告内容	■生活支援体制整備事業（生活支援コーディネーター）について (1) 調布市の事業の概要について 【目的】 ・少子高齢化が進展する中、高齢者が生きがいを持ちながら住み慣れた地域で自分らしい生活をするためには、地域とのつながりや見守り、支え合いが必要である。 そこで、地域住民が主体となった生活支援・介護予防が図れるよう、地域支え合い推進員と地域住民や専門職・行政と一緒に学び、考え、工夫しながら地域づくりの推進を目指している。 【事業先】 ・調布市では平成27年4月から事業を開始され、平成29年4月からは第1層（市全域）の地域支え合い推進員を高齢者支援室職員、第2層（市を分割した地域圏域）を調布市社会福祉協議会に委託して事業展開している。 (2) 事業の内容について ①調布市の取り組み ⇒第1層（市全域） ・地域のことを知るため、考えるための、普及啓発活動や講演会を市全域で実施。 ・関係機関の連携体制の構築や協議体の運営。 ・支え合い推進員の拡充、育成。 ②社会福祉協議会の取り組み ⇒第2層（市を分割した地域圏域） ・支え合い推進員8人が、地域住民の活動を支援。 ・地域のことを知るため、考えるための、普及啓発活動や講演会を地域で実施。 ・地域団体間の関係づくりや、参加希望者への案内やマッチングを行う。

1. 調布市の取り組みの具体的事例

(1) スマホを楽しむ会

・令和3年6月から地域住民向けに「ネット・スマホをもっと楽しみたい方あつまろう会」を毎月実施。まずはスマホやPCを使っている人を対象に集ってもらい、知りたいこと・学びたいことを聞くことから始めた。

現在は、コーディネーターと参加住民と一緒に調べながら繰り返しスマホの練習を行いながら、多世代交流にも繋げている。

(2) 坂の上のばあちゃん家

・「たまには、ばあちゃん家でゆっくりして、ごはんを食べていたら？」という地域住民の“思い”をコンセプトに「子育て中の親子が安心して、楽しく食事ができる居場所づくり」として、スタートし、月1回の活動を実施。

(3) スタディールーム ～それぞれが居心地のいい居場所～

・誰もが利用できる場所として、出入り自由でその人なりの過ごし方ができる「場所」が「あったらいいな」の思いを地域住民と一緒に実現に向けて検討を進めた。結果として、乳児とその親、小中学生、働く世代、高齢者や福祉関係者と多世代が参加した。

【その他の事例】

・ひだまりサロン「スマイル」・みんなの部屋 ・10の筋力トレーニングお試し会 など

2. 考察（これらの取り組みを荳崎市にどう活かせるか）

高齢化が進展していく現代においては、ネガティブな発想よりも、いくつになっても元気で「どう楽しく生きるか」というポジティブな考え方と、その取り組みが大切になる。中でも、趣味や日常生活全般を通じて人が集う機会と居場所づくりが求められている。

「おしゃべりしたい時」誰かに会える場所。「体を動かしたい時」誰かと運動できる機会などを身近な地域で構築して行くためには、その支援者が必要となる。

市と社会福祉協議会においても、生活支援コーディネーターの増員と地域住民による活動の推進を目指し毎月の講座を開いている。そこで、市と社会福祉協議会とも情報交換を行いながら、着実なステップを踏んで調布市の様な具体的で多様な取り組みに繋げていく。

また、すでに意欲的な住民によるサークル活動がいくつか展開されているので、要望の聴取やサポートをしつつ、必要であれば制度改正の提言をおこなうなど、調布市をはじめとする先進事例を「荳崎モデル」に落とし込み、活動支援に結び付けていきたい。

